

10月30日 創世記9章8～17節 今日の説教から

説教題：「空にかかる虹の橋」

今日の聖書箇所は、異教や偶像への礼拝に染まってしまったすべての人間を滅ぼすことを神様が決断し、しかし信仰深いノアの家族とそれぞれの動物は生き残らせた、その大洪水が終わったあとの箇所であります。

私たちは今日の箇所で示されているように、神様と和解をすることが出来ました。どうしようもないほどに人間は神様から離れてしまいましたが、神様の方から救いの手を伸ばして、和解を申し出てくれたのです。それは何よりもイエス様の十字架において現れている、罪の赦しと復活の希望によって私たちに示されています。私たちは神様のことを全然理解していなかった、しかしイエス様がこの世に遣わされて、その御言葉によって神様のことを教えてもらいました。そのおかげで私たちは神様を信じる事が出来るようになり、イエス様を主であると告白することが出来るのです。

しかし、このように正しい信仰を与えられているにもかかわらず、どうしてこの世には未だにキリスト教以外の宗教があるのでしょうか。キリスト教以外の宗教はすべて間違っているのか、あるいは、すべてではないものの誤りが含まれているのでしょうか。この問題に触れた作品として、18世紀の思想家で劇作家であるレッシングの代表作に『賢者ナータン』という戯曲の中の「三つの指輪」にまつわる物語があります。この要旨の裏、聖書箇所の下に記しているのをお読みください。

この物語に込められているのは「宗教的寛容」というもの、相手の宗教を陥れることなく自分の宗教をまっすぐに信じる事の大切さが語られています。この「寛容」という言葉は、「あなたがその信仰を持つことを私は一切否定しません。しかし、わたしは自分の信仰を一切曲げるつもりはありません」という態度に示されるような、頑なで真っすぐな信仰の態度を意味しています。決して譲ってはいけない信仰の芯を守ることが求められているのです。

神様はイエス様の十字架によって私たちの罪を赦してくれました。しかしその赦しは、「今後も裏切ってもかまわない」ということを意味しているわけではありません。神様は、私たちがその言葉に背いてもすぐさま洪水で流したりはしません。しかし、確かに神様は私たちに「正しく生きる」「義である」ことを求めています。私たちが天の国に入るために、復活のからだに命を与えるために、イエス様の言葉に従って生きることが求められています。かつての契約ではなく新しい契約、イエス様の十字架によって結ばれた新しい契約を、虹がかかるたびに神様は心にとめてくれているからこそ、私たちもそれに応える必要があるのです。

私たちには、統一的な人生があるわけではありません。たった一つの聖書を頼りにして、たった一人の神様を信じて、たった一人のイエス様に従って、唯一の聖霊に満たされて歩みながらも、それぞれの形で信仰を歩んでいます。それぞれの賜物を生かされて、歩むことがゆるされているのです。その根底には、時に「嫉妬深い」と言われるほどの神様の深い愛が確かにあります。そのことを実感しながら、神様に喜ばれる正しい信仰の道を、今週一週間も、これからも歩み続けていきましょう。

今日の説教箇所：創世記9章8～17節

- 8:神はノアと彼の息子たちに言われた。「わたしは、あなたたちと、そして後に続く子孫と、契約を立てる。あなたたちと共にいるすべての生き物、またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など、箱舟から出たすべてのもののみならず、地のすべての獣と契約を立てる。わたしがあなたたちと契約を立てたならば、二度と洪水によって肉なるものがことごとく滅ぼされることはなく、洪水が起こって地を滅ぼすことも決してない。」
- 12:更に神は言われた。「あなたたちならびにあなたたちと共にいるすべての生き物と、代々としえにわたしが立てる契約のしるしはこれである。すなわち、わたしは雲の中にわたしの虹を置く。これはわたしと大地の間に立てた契約のしるしとなる。わたしが地の上に雲を湧き起こらせ、雲の中に虹が現れると、わたしは、わたしとあなたたちならびにすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた契約に心を留める。水が洪水となって、肉なるものをすべて滅ぼすことは決してない。雲の中に虹が現れると、わたしはそれを見て、神と地上のすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた永遠の契約に心を留める。」神はノアに言われた。「これが、わたしと地上のすべて肉なるものとの間に立てた契約のしるしである。」

レッシング作『賢者ナータン』「三つの指輪」

ある商人の家では代々、家宝である魔法の指輪を最愛の息子が譲り受けていた。しかしある代の商人は3人いる息子のいずれも愛しくてならず、指輪を渡す息子を選ぶことが出来なかった。そこで、そっくりの指輪をもう二つ作ったうえで3人に指輪を与えた。父親の死後、3人の息子の中でいずれの指輪が本物であるかということ巡っていさかいが起こった。息子たちは裁判へ訴えに出るが、話を聞いた裁判官も指輪の見分けが付かないため、「3人はいずれも各々の指輪を本物と信じるがよい、そうして本物の指輪がもつ力が実際に表れるよう各自で努力せよ」と助言し、訴えそのものを退けた。